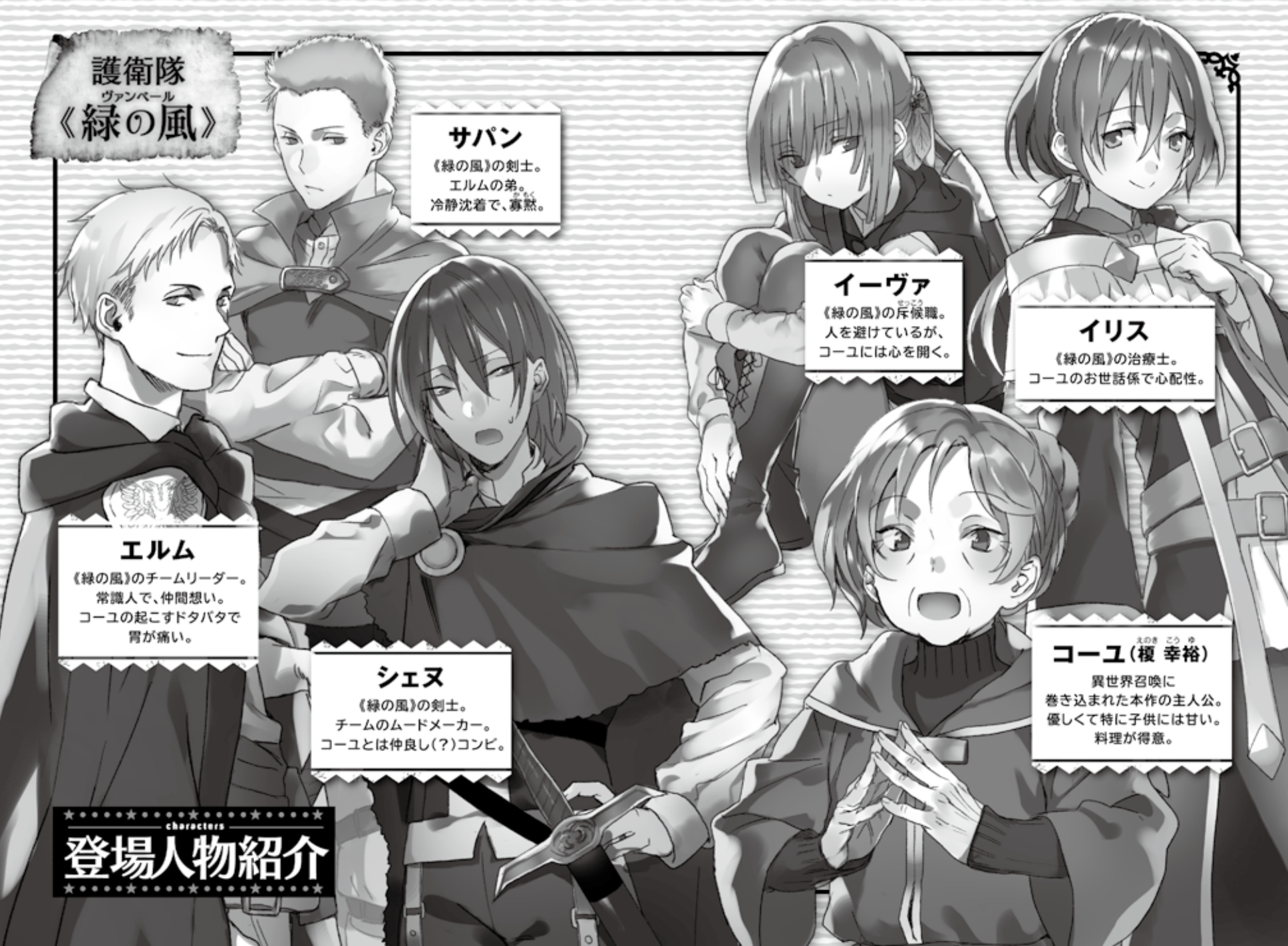
異世界召喚に巻き込まれたおばあちゃん

森で
のんびりさせて
いただきます

Yunosu Natsumoto

夏本ゆのす


護衛隊
《緑の風》
サパン
《緑の風》の剣士。
エルムの弟。
冷静沈着で、寡黙。
イーヴァ
《緑の風》の斥候職。
人を避けているが、
コーユには心を開く。
イリス
《緑の風》の治療士。
コーユのお世話係で心配性。
エルム
《緑の風》のチームリーダー。
常識人で、仲間想い。
コーユの起こすドタバタで
胃が痛い。
シェヌ
《緑の風》の剣士。
チームのムードメーカー。
コーユとは仲良し(?)コンビ。
コーユ(榎 幸裕)
異世界召喚に
巻き込まれた本作の主人公。
優しくて特に子供には甘い。
料理が得意。
characters
登場人物紹介

1　プロローグ

ころころころ……

孫夫婦の家に仮住まいしていた私――榎幸裕（えのきこうゆ）が自分の家に帰る途中、坂道を上っていたら、足元に小さなぬいぐるみ（？）が転がってきたのですが……

何かしら？　これ。

あ、ストラップっていうものかしら？　確か、孫娘のしんちゃんが学生の頃にリュックに下げていたわ。

これ、どなたのでしょう？　坂を転がってきたけれども。

顔を上げると、坂の上に高校生くらいの子たちが何人か見えました。

あ、あのお嬢さんのなのかしらね、キョロキョロしてらっしゃるし。

ではでは、届けてあげましょうね。

肩に掛けたバッグを背中に回し、パンパンになっているキャリーバッグを引いて、私は坂を上り始めます。

引っ越しの荷物はあまり多くなかったのだけど、面白そうな物産展を見つけたからつい寄り道し

て、たくさん買い込んでしまったのよね。
よいこらしょ、よっこいしょ……荷物が多くて重くて、なか、なか、進まないわ……はぁ。
仕方ないわね、年だもの。
でも、これからは一人で暮らすのだから、自分の物くらいは運べなきゃいけないわよね。
少しずつあの子たちに近づいてきたけれど……はぁ、坂って結構たいへんっ。
えっ？　何？
あの子たちの周りが光ってる？
よくわからないけれど、地面に光が走って――あ、私の足元まで光が……
逃げる間もなく、私は光に包まれました。

◆　◆　◆

ここは、どこ？　何もない、真っ白な空間。
私は……確か今日、しんちゃんの家から引っ越して……そう、足元が光ったのよ！
それで……どうしたのかしら。
あら？　自分の身体が見えないわね。一体どうなっているの？
「あーそろそろ、いいでしょうか」
きゃあっ！　何？　誰？

いつの間にか、目の前には一人の男性が立っていました。
ひょろりとした体形。一重の眠たげな目。笑っているのか泣いているのか判然としない口元。
ですが、その銀色の瞳と長髪は見事ですね。
……外国の方かしら？　真っ白な変わったデザインの服を着ているけど、とても優しそうね。
「あー、いわゆる神と呼ばれているものですが」
あら。口に出してないのに答えてくれたわ。手品かしら……なぜか声を出せないので、私は助かりますけど。
それにしても、自分のことを神様だなんて、何を言ってるのかしらね。もしかして悪戯？
「いえいえ、悪戯ではなく本物の神です」
年寄りだからってからかわないでよ？
私がじっと睨みつけると、その男性は眉を下げました。
「だから、本物の神です。あなたは、とある現象に巻き込まれてお亡くなりになりました」
えっ、私、死んじゃったの？　どういうこと？
これから一人でのんびり暮らす予定だったのにっ。
何かと世話を焼いていた孫が所帯を持ったから、安心して隠居することにしたの。
やっと、のんびりできるはずだったのよ？　やりたかったこと、これからするつもりだったのに！
私は光に包まれただけ。どうして死ななきゃいけないのかしら。

私が驚きつつも怒りをぶつけると、男性は深々と頭を下げました。
「すみません。自分たちの国の滅亡を防ぐため、勇者召喚をした世界がありまして」
はぁ？　何それ。言っている意味がさっぱりわからないわ。
「力のある少年たちを召喚した環に、あなたの半身が巻き込まれたのです。彼らは全身が召喚されたので、無事なのですが」
えっ？　つまり、半身が巻き込まれた私の身体って……
「ええ。大変申し訳ないのですが、あなたは元の世界では身体が潰れた状態になり、この世界には精神と巻き込まれた荷物だけが召喚されています」
死んじゃったのね。魂だけなんだ……
ん？　荷物？
「ええ。荷物もこちらに来ています。お詫びといってはなんですが、身体を再構築いたしますので、こちらの世界で生きていかれませんか？」
……誰も知らないところで？　一人で？　私、日本語しかできないのに。
「こちらの言語はすべて理解できるようにします」
なら安心ね。ああ、でも病院はあるかしら。年寄りだから持病があるのよ。
「再構築するので、若返れますよ。そういう力も付与します。そうそう、この世界には魔法もあります。どのような力が欲しいですか？」
魔法っ！　メルヘンですのね。憧れるわ。

そうね～、お水とか出せると便利ですよね。
「では、生活に便利な魔法をいろいろ使えるようにしておきます」
最初はショックだったけれど、何だか楽しみになってきたわ。
ちょうど一人で暮らすところだったのだもの。ちょっと場所が変わったと思えばいいわよね。
ただ、孫に会えなくなったのは寂しいけれど。
「頑張ってくださいね～。あ、荷物はすべて〝ポケット〟に入れておいたので。ポケットをイメージすれば、そこから出し入れできますから、むこうで落ち着いたら確認してください。何かあったら教会を訪ねてくださいね」
はいはい。
と思ったのも束の間、神様はパチンと指を鳴らしました。
その直後、私は光に包まれて――
あ、何だか目が回る……

◆　◆　◆

ここは、どこかしら。床は石畳みたいね。冷たい……
ああ、寝ている場合じゃないわ。起きないと。よっこいしょ……
きょろきょろと周りを見渡してみたけど……映画に出てくる西洋のお城みたいなところね。天井

が高くて、遠くには大きな扉があるわ。
あ、あっちにいるのが、本命の召喚された少年たち？　さっき、坂の上にいた子たちよね。
ガシャっと重そうな扉が開いて、煌びやかな服装の方々が――王冠を被った太っている人と、従者のような人が二人。
ゆっくりと少年たちの前に歩み寄って……王冠を被った人が偉そうに咳払いをして話し始めたわ。
「我が其方たちを召喚したトアル国の王、アル・コールである。今、この国は魔王によって、危機に瀕しておる。それゆえ、神の御告げにより異なる世界から勇者を召喚した。それが其方たちだ。魔王を滅すれば異世界への帰還の環が現れる。よいか、我らとともに魔王を滅ぼすのだ！」
えっ、そうなの。あなた方が私たちを召喚したのね。
私が驚いて見ていると、少年たちは王様を鋭く睨みつけました。
「何を勝手なこと言ってるんだ。俺たちにはこの世界なんて関係ないだろう」
「帰してよ、すぐに帰してよぉ」
「異世界召喚だと……ラノベか……」
「俺が勇者？　マジか」
まぁまぁ、混乱しているわね。当たり前だわ。
中には、やる気になっている子もいるみたいだけど……大丈夫かしら。
それにしても、「らのべ」って何でしょう？
「ステータスを見てみよ。職業があるだろう。其方らの中に勇者のジョブを持つ者はおるか」

ステータス（？）って何？
あ、あの子たち、何かしてる。ん？「ステータスオープン」って言えばいいのかしら。
私もこっそり試してみましょう。
「ステータスオープン」

【名　前】コーユ
【年　齢】７０
【職　業】巻き込まれたおばあちゃん
【Ｈ　Ｐ】６０
【Ｍ　Ｐ】１０００
【属　性】※※※※※
【スキル】緑の手

目の前に文字が浮かんできたけれど……何かしら、これ。一部読めないわね。
「あ、俺、勇者だ」
「私、聖女だわ」
「聖騎士だ」
「……」

少年たちも試したみたい。みんな、賑(にぎ)やかねえ。
一人だけ黙っている子がいるけど、どうしたのかしら。
「そこの年寄りっ。お前も勇者なのか」
「えっ？」
王様に突然声をかけられて、びっくりしちゃった。
ええと、私の職業(ジョブ)は……
「あの、私は〝巻き込まれたおばあちゃん〟だそうです」
「何？　聞いたこともないおかしな職業(ジョブ)だが……偶然環(サークル)に入っただけのただの役立たずか。お前はどうしたい。勇者たちが帰還の環(サークル)を出すまで、城の厨房ででも働くか？」
お城で？　そんなの嫌よ。私、やりたいことがあるんですもの。
「あの、お役に立てることなど何もなさそうなので、どこか田舎で畑でもしたいのですが、よろしいでしょうか」
王様は興味なさそうに、ふんっと鼻を鳴らして頷きました。
「よし、わかった。まぁ、こちらにも巻き込んでしまった落ち度はあるからな。支度金をやるから、街で働くがよい」
「ありがとうございます。すぐに出発いたします」
門番さんから街にあるいろいろな施設の場所を聞き、城下に行きました。それはもう、すぐに。

危機に瀕している？　何の冗談かと思ったわよ。
あんな趣味の悪い金ピカな服装で、ブクブクに太って。
我らとともに、じゃないでしょう。本心は、〝お前たちだけで戦ってこい〟ってことよね。
まあ、私はおばあちゃんだし。戦えるわけないから、下働きさせようって？　見え見えよねぇ。
とりあえず、街から出て田舎の村に行く方法を探さなきゃね。
門番さんは、まずギルドに行けって言っていたかしら。
ギルド、ギルド……
街の大通りをキョロキョロしながら歩きます。
街の人は皆、変わった格好をしているわねぇ。髪の毛の色もカラフルで。やっぱり、ここは異世界ってところなのかしら。
あら、パン屋さん？　美味しそうなパンがあるじゃない。
通り沿いに、カウンターでパンを売っているお店を見つけました。
おいくらかしら。支度金をいただいたから、少しはお金があるのよね。
「ご主人、このパンはおいくら？」
「商品の下に書いてあるだろう。ばあさん読めねえのか。銅貨二枚だ」
「ごめんなさいね、年寄りなので見えにくいのよ。それと、銅貨は持ってないの。パンを五ついただきたいのだけど、銀貨で大丈夫かしら」
「仕方ねえな」

お店のご主人はパンを五つ袋に入れて渡してくれました。
肩掛けバッグから銀貨を渡して、お釣りを貰います。
神様（？）は、荷物は全部ポケットに入ってるって言っていたけれど、肩掛けバッグはそのままだったのよね。だからバッグの中に、あの偉そうな王様から貰ったお金を入れたわ。
でも……さっきバッグの中を見たら、王様に貰ったお金よりも多かったような？　まあ、今はいいわね。後で確認しましょう。
それから私は、早速袋の中のパンを少しだけちぎって味見します。
このパン、ドイツ風の黒パンみたい。少し酸味があるけど、薄く切って具材を載せると美味しそう。こういうの好きだわ。
そうそう、ギルドに行くんだったわね。年をとると忘れっぽくて嫌ね。
「ご主人、ギルドってどちらでしたかしら。道に迷っちゃって、わからなくなってしまったの。教えてくださる？」
ご主人は頭を掻いて肩をすくめました。
「はあ、ばあさん、大丈夫かい。ギルドに何しに行くんだい？」
「どこか田舎に引っ越したいと思いましてね。護衛を頼もうかと」
「どこかって……ばあさん、少しは考えような？　行き先も決めてないなんて、あんた、それじゃ無理だよ」
ええ……考えた結果、この国を出たいのよ。

でも、そうよね。〝どこか〟じゃ、護衛を頼むのは難しいわよね。
そうだわ、保養地を聞いてみましょう。そこに行けばいいわ。
「この辺りで静かな保養地を教えてくださる？　私、この国に着いたばかりでよくわからないのよ」
「ほお、外国の人だったのかい。一人で来たのか？」
「そうなの。夫も子も亡くしたから、国にはいたくなくて。乗り合い馬車を使って一人で来たのだけれども、ここがどこなのかさえわかってなくて」
そう言うと、ご主人は大きくため息をつきました。
「……あんた、危なっかしくて見てられねえや。ちょいと待ってな。うちのマリスにギルドまで案内させるよ。今手紙を書いてやるから、着いたら受付のアンナに見せるんだぞ。そうすれば、何とかしてくれるだろうさ」
「まあ、なんてご親切に。ありがとうございます」
パン屋のご主人に丁寧に頭を下げると、「いいってことよ！」と笑って返してくれました。

それから、パン屋の坊っちゃんのマリスくんに連れられてギルドに向かい、歩いて数分ほどで着きました。
ところで、ギルドって何屋さんなのかしら。
「おばあちゃん、あの髪の赤い人がアンナさんだよ」

ほうほう、見事な赤髪ねえ。
じゃあ、パン屋さんが書いてくれたお手紙を出して。早速カウンターで声をかけます。
「素敵な保養地までの護衛を依頼したいのですが、こちらでよろしいでしょうか」
「はい。あ、お手紙ですか？　ちょっと拝見します……なるほど。保養地で静養したいので、宿か家を借りたいということですね。では、まず行き先を決めましょう。滞在期間とご予算にもよりますが……」
赤髪のアンナさんは地図と物件情報をカウンターの上に広げ始めました。
「こちらは湖に近い保養地デライクです。このあたりは穏やかな気候なので人気がありますし、貴族も多くて治安も文句なしですわ」
そう言うと、ペンの先で場所を示してくれました。
でも、そこはお金も気も使いそうね……
「次に、こちらが深遠の森に近いティユルです。冒険者が多い街ですが、温泉があるため湯治にいらっしゃる方もいます。デライクより治安に不安はありますが、ギルドも目は光らせているつもりです」
何ですって、温泉!?　あるの？
地図を見る限り、王都から遠いのも嬉しいわね。
「ところで、期間と予算はどのくらいを……？」
おずおずとアンナさんが聞いてきました。

「滞在期間は具体的には決めてませんけれど、少なくとも数ヶ月は暮らしたいですわね。とりあえず、予算はこれで足りるかしら。そこまでの旅費、滞在費込みでお願いします。護衛の方には街まで連れていっていただければ」
そうね、保養地でしばらく暮らして……そこからは後で考えますわ。
私が肩掛けバッグの中のお金を見せると、アンナさんは目を見開きました。
「は、白……金貨……滞在されるのは何名でしょうか。見たところお一人のようですが……」
唖然とした表情のまま、アンナさんは問いかけてきます。
「ええ。一人ですわ。ようやく一人暮らしできますの」
はあぁ……と、アンナさんが首をふりふりため息をついています。
あら、とても大きなため息ね。
「危ないです。とても危険です」
カウンターから身を乗り出して、私の肩に手を置いて言いました。
「あら、大丈夫ですわ。家事はこなせますのよ。お料理もお掃除もお洗濯も。この年ですからね。一通り経験はあります」
「そうではなく。一人暮らしは危険ではないでしょうか。誰かお手伝いを雇うとかお考えになったほうが……」
あら、こちらだと一人暮らしというのは珍しいのかしら。
「……では、ご予算と状況を考慮しまして、治安の良いデライクということで……」

「ティユルでお願いします。物件はどのようなものがありますか？　できればこぢんまりとした庭付きか畑付きがいいのですけれども」
アンナさんはデライクがお薦めみたいですけど、私は王都から遠いティユルがいいわ。
「ティユル……わかりました。二、三件はご希望に添いそうな物件がありますので、直接見てからお決めになるのがよいかと思います。ティユルまでの護衛を募集しますので、二、三日お待ちいただけますでしょうか」
「あ、はい。では、明後日に参ります。あ、でも……」
「何でしょう？」
「今夜はどうしたら……この辺りで良い宿はありますかしら」
「宿も決めていらっしゃらなかったとは……少々お待ちください」
アンナさんは紙にさらさらと何かを書き、手渡してくれました。
「ギルドの前の通りを右手に進み、二つ目の角を右に折れた二軒目に、『ミャオの寝袋』という宿があります。そこで、この手紙をお出しください。アンナの紹介と言ってくだされば通じますから」
紹介状ですのね。なんて親切な方。
アンナさんに感謝の言葉を述べた後、早速宿に向かうため踵を返そうとしました。
すると、服の裾を引っ張られ、腰の辺りから声がします。
「おばあちゃん、『ミャオの寝袋』に行くの？　僕、案内するよ」

どうやらマリスくんが私を待っていてくれたみたいです。
「ありがとう。お願いしてもよろしくて？」
皆さん、優しくて……涙がこぼれそう……
そうして、マリスくんに連れられてギルドを出ました。
「おばあちゃん、こっちだよ～」
「ちょっと待ってね。あまり速くは歩けないの」
「おばあちゃん、手を繋ごうか？　また迷子になるよ？」
ま、迷子……私ったら迷子だと思われてたの？
でも、仕方ないのかしら。確かにこの世界に来た迷子みたいなものですもの。
マリスくんと手を繋ぎ、パン屋の人気メニューの話などをしながら宿に向かいます。
宿でアンナさんの紹介状を見せると、すぐに二階の部屋に案内されました。
明後日までの二泊分の宿代を先払いし、一息ついたところで受付の方にお願いして、たらいにお湯をいただきます。
それから手足を洗うと……いつの間にか、ベッドで眠ってしまってたわ。
本当に、疲れていたんですもの。

【パン屋　イグランの呟き】
なんとまぁ、危なっかしいばあさんがいたもんだ。

生地は高級そうで皺がない、スカートかズボンかわからない変な服装。
言葉は丁寧で優雅な動き。いや、のんびりか。
だが、まったく人を警戒しないのはおかしいんじゃないか。
一人暮らししたいと言って、単身で乗り合い馬車を使うとか？　目が弱って文字も読めないのに、一人で保養地まで行くとか。
荷物だって、旅をしているというのに肩掛けのバッグ一つきりだ。
しかもばあさん、バッグからいきなり銀貨を掴んで出すし。財布にさえ入れてないのかよ。
まあ、あんとき金貨もちらっと見えたから、財布が買えないとかいう話じゃないんだろうが。
強盗に遭うなんて考えてもいないんだろうな……
アンナ、頼んだぜ。何とかしてやってくれ。

【冒険者ギルド　アンナの呟き】
危なっかし過ぎる。一人で歩かせちゃ駄目でしょう!!
あのおばあさんに白金貨を見せられた時には冷や汗かいたわよ。
危ないですと注意しても、一人暮らしはできる、料理も洗濯も掃除も大丈夫だなんて。
家事の心配なんてしてないのよ、こっちは。騙されたり、強盗に遭ったりするんじゃないかって言ってるのに。
まあ、普通の人にはそんなこと言わないわよ。平民は皆、そんなものだし。

でも、あれはないわ。のほほんとしているうちに、身ぐるみを剥がされてしまいそうな気がする。やんごとない家の奥様だったのでしょうけど……もう少し警戒心というものを覚えたほうがいいと思ったのは、私だけじゃないはず。

マリス、ちゃんと宿まで案内してね～頼んだわよ!!

【パン屋の息子　マリス十歳の呟き】

あのおばあちゃんの手……とても柔らかかった。温かくて。

僕にも丁寧な言葉で話してくれて……一人きりで暮らし始めるんだって、少し寂しそうにしてた。旦那さんも子供も死んじゃったんだって。

大丈夫かなぁ、すぐに迷子になるみたいだし。

僕んちのパン屋に来たときも、ギルドに行こうとしてたのに、美味しそうな匂いにつられちゃったんだって。

おばあちゃん、本当に大丈夫？

2　ギルドへ

ああ、よく寝たわ。

目が覚めると、見慣れない部屋にいました。

ここはどこかしら……あ、そっか。私、異世界に来たのだったわ。それで、宿に泊まったのよね。しんちゃん……会いたいな……

ううん。私はもう死んじゃってるのよね。お葬式、ちゃんとやってもらえたかしら。迷惑かけちゃったわね。

まあ、しんちゃんにはもう旦那さんがいるのだから、私が心配しなくても大丈夫よね。孫の結婚式に出られただけでも、良しとしましょう。

さて、今日は何から手をつけましょうか。

まずは荷物の確認ね。確か神様（？）はポケットに入れたって言っていたわ。あとは肩掛けバッグの中のお金も確認しないとね。

王様に貰った支度金は金貨二枚と銀貨五枚だったはずなのに、パン屋で支払おうとバッグを見たらなぜか白金貨が五十枚あったのよね。誰がくれたのかしら……って、神様しかいないわよね。

持っていた預金通帳と現金の分かしら。あれをこの世界の通貨に換金してくれたのでしょう。ナイス神様。

私はすっかり頭から抜けていたわ。お金がないと生きていけないわよねえ。

さて、ポケット、ポケット……あ、これかしら。

目を瞑って大きなポケットをイメージし、懐を探ってみると確かにありました。

宣伝文句で〝十日分は入る〟って書いてあったかなり大きめのキャリーバッグだけど、本当にポ

ケットから出せるのかしら。
昨日はバタバタしていて汗をかいたのに、疲れすぎてて手足を拭くだけで寝ちゃったのよ。お着替えもしないとね。よいしょっと。
キャリーバッグは出せたけれど、なんだかこの世界には場違いな感じ。
まあ、いいわ。神様が持たせてくれたのだから、問題ないでしょ。
いろいろ詰め込んでいるのよ。洋服に洗面道具、化粧品や薬、おやつと調味料、その他諸々。
だって、デパートで面白そうな物産展をやっていたのですもの。つい買っちゃうわよね。
黒糖や蜂蜜、ハーブ、ビスケット。藻塩に味噌、出汁パック。料理本と家庭の医学の本、それからお庭に植えるつもりだった種、などなど。
いろいろ入っているわねぇ。雑多なのは仕方ないわね、私だもの。
とりあえず着替えて朝食にしましょう。薄緑のハイネックのシャツと、深緑のワイドパンツに着替えます。上に羽織るカーディガンは黒で。
あ、お金は少し分けて持っていたほうがいいかしら。白金貨五十枚と金貨一枚はスカーフに包んでキャリーバッグに入れておきましょう。
肩掛けバッグには、金貨一枚と銀貨、銅貨でいいかしら。
宿泊費は二泊三日で銀貨三枚でした。黒パンは一つ銅貨二枚、五つなら銀貨一枚くらいかなって思っていたのに、銀貨一枚を出したらお釣りがじゃらじゃら返ってきたのよ。どこかでお金のことを教えてもらわないと。

きゅーくるくる……
お腹が限界みたい。そういえば、昨日の朝にいただいたきりだわ。
キャリーバッグをポケットに戻したら食事に行きましょう。
何があるのかしら、この世界。楽しみだわ～。

宿の一階は食堂になっているみたいです。美味しそうな匂いがしてきました。
下りてみると、食堂はお客さんがいっぱいいて賑やかです。
「おはようございます。朝食を召し上がりますか～」
食堂の入り口でキョロキョロしていると、ふくよかな女将さんが声をかけてくださいました。
「はい。どのようなものがありますか？」
ワクワクして聞いてみます。どんな料理があるのでしょう。
「朝はパンとスープですよ」
あら、選べるわけではないのね。
「では、それをお願いします」
とりあえず頭を下げてお願いしました。それから空いている席に腰を下ろします。
「はぁいよっ」
威勢のいい掛け声とともに運ばれてきたのは、木の椀に盛られた具だくさんのスープです。あとは黒パンの薄切り二枚だけ。

周りを見回すと、パンはちぎってスープに浸しながら食べるようです。
初めての異世界のお食事。ふふふん。楽しみね。
まずはスープに入っているお芋みたいなものを、スプーンで掬って食べました。茶色いけど、じゃがいもみたいね。
次は真っ白な具をもぐもぐ。うん、人参ぽい味。
お肉は何かな～。豚肉かしら。素材の味がするし、よく煮込んであるのだけれども、味付けは塩だけみたい。少ししょっぱいわ。
パンをスープに浸してみると……あら、美味しいわね。少し酸味のあるパンに塩味がついて。
でも……私は少し高血圧気味。スープは全部飲まずに、パンを浸すのも少しだけにしましょう。
のんびり暮らす前にまた死ぬのは嫌だもの。
だから、パンはそのまま食べましょうね。
もきゅもきゅもきゅ……硬いです。まだ歯は揃っていますが、柔らかいほうが好きです。
噛めば噛むほど味は出るのだけど。はぁ、パンに口の中の水分も持っていかれるわ。
飲み物はお水だけみたい。朝ですものね。でも、お茶くらいは欲しかったわ。
周りを見渡しても、お茶を飲んでいる方はいません。ということは、お茶がとても高価か、お茶を飲む習慣がないということなのでしょう。
お茶が飲みたいわ。緑茶や紅茶とは言いません。せめて、ハーブティが飲みたいです。
料理用のハーブは持っているけれど、早めにお茶に向いたハーブを探しましょう。

コーヒーもできれば……なければ豆を煎ってコーヒーもどきでもいいわね。
これは急務です。生活する上で!!
今日は、市場を見て回ることに決めました。私ののんびり生活のために。

食事を終えた私は出かける準備をして、一階に下りて入り口にいる女将さんに声をかけます。
「出かけてきますね。鍵はこちらに預ければいいのかしら？」
女将さんは頷いて、今日の夕食はどうしますかと尋ねてきました。
夕食の話をされたということは、お昼は外で食べてくださいということなのかしら。
夜は疲れているでしょうから、こちらでいただきますと答えて出発です。
この世界を知るために、本か何かを探しましょう。あと、市場でお買い物と昼食ね。
することはたくさんあるけれど、道がわからないわ。困ったわね。
あ、そうよ。ギルドで案内人を雇えばいいんじゃない？
そうと決まれば、ギルドに急ぎましょう。

……で、ギルドに着いたのはいいのだけれども……中に入れません。
出入り口には、体格のいい方が行き交っています。ものすごい混雑です。
えっと。どうしましょう……
「……ぁ…ぁの……」

後ろから何か声が聞こえます。
「はい。なんでしょう？」
振り返ると……誰もいません……
つんつんとズボンが引っ張られる感じがして視線を下に向けると……あらまぁ、マリスくんではありませんか。
「マリスくん、おはようございます」
「おばあちゃん、おはようございます。ギルドに用事？　中に入りたいの？」
まぁ、よくわかったわね。察しの良い子ですわ。
「そうなの。ちょっと頼みたいことがあったので。でもねえ、人が多くて」
「早朝のギルドは混んでるんだ。いい依頼は早い者勝ちだもん」
「まあ、そうだったの。う～ん……でも、出直すのもねえ……」
「じゃあ、ちょっと待ってて。頼みたいことがあるんだよね。アンナさんを呼んでくる」
マリスくんは、人の間を縫うようにしてギルドの中に入っていきました。
若いっていいわ。あの身のこなし……私には難しいでしょうね。

しばらくすると、マリスくんがアンナさんを連れてきてくれました。
どこか慌てた様子で、アンナさんは昨日より少し早口で問うてきます。
「コーユ様、お約束は明日だったかと……何か急用でも？」

「ええ。別口で今日依頼したいことがありまして」
「ああ、そうなのですね。では、中でお伺いいたします。どうぞ、こちらへ」
アンナさんは、昨日と違って部屋に案内してくれました。なぜでしょうか。
ちなみにマリスくんは私の側にいてくれています。なんていい子なのかしら。
アンナさんが椅子を勧めてくれたので、マリスくんと並んで座りました。木製の長椅子です。
ギルドに入るまでちょっと時間がかかって、疲れていたので助かったわ。
「別口のご依頼とはどのようなものでしょう」
「街の観光もしつつ、買い物や教会、図書館などもあれば行ってみたいのです。道案内と護衛、荷物持ちをお願いできる方を募集していただけますか？」
「観光……ですか……わかりました。急な依頼ですから、銀貨五枚でいかがでしょう」
「はい、それでお願いいたします」
「では、依頼をして参りますので少々お待ちください。請け負う人が見つかるまでの待ち時間で、明日からの予定についてお話しさせていただいてもよろしいでしょうか？」
私が頷くと、アンナさんは微笑んで席を立ち、依頼を出すために部屋を出ていきました。
なるべく早くいい方が見つかるといいけど。時間は有限ですもの。
「おばあちゃん、どこを見たいの？　僕が案内するよ？」
マリスくんたら、優しいのね。でもね、荷物も持ってもらいたいし。
「ありがとう。けれど、お買い物もしたいの。荷物が多くなるだろうから、マリスくんには大変よ。

ごめんなさい、気持ちはとっても嬉しいんだけど」
「ううん。僕が勝手に言ってみただけだし。でも、どこが見たいの？」
「うふふ。市場でしょ？　教会？　あと、図書館ってあるかしら。ああ、そうだわ。ちょっと教えてくださる？　こちらのお金の単位。私は外から来たから、よくわからなくて。でも、換金はしてあるのよ？」
話しながら思い出しました。貨幣単位が未だにわかってないことを。
いろいろ持っているんだけど、結局わからないから言われた通り払っています。ぼったくられても気づかないなんて、困るわよね。これから市場を回ってみるつもりなのに。
昨日は親切な方々に助けられたから良かったものの、これからもずっと周りにそういう人がいるわけじゃないと思うのよ。
今頃になって、やっと気づきました。あの神様という方に出会ってからずっと夢心地のままだったけど、しっかりしなきゃいけないわよね。
捲し立てるような私の質問に、マリスくんは呆然としてしまいました。
ずいぶん早口になってたものね。ああ、どうしましょう。
彼はハッと我に返ったみたいになってから、私に問いかけます。
「お金のことを知りたいの？　あのね、鉄貨と銅貨と銀貨と金貨と……」
マリスくんは丁寧に教えてくれました。
子供のお駄賃として用いられることが多くて、一番価値が低いのが鉄貨。

立ち読みサンプル はここまで

それが十枚で銅貨一枚、銅貨十枚で大銅貨一枚……というようになっているそうです。種類は、価値が低い順に鉄貨、銅貨、大銅貨、銀貨、大銀貨、金貨、大金貨。
白金貨は一枚で大金貨十枚の価値とのこと。でも、マリスくんは見たことがないんですって。
両親と子供二人の一家の場合、金貨一枚と大銀貨二枚くらいでひと月暮らしていける、ってことは……銅貨が一枚十円くらいだから……白金貨五十枚って……五億円？
でも、私の通帳にはそんなに入ってなかったわよ。神様、ちょっと奮発しすぎじゃないかしら。
アンナさんが言った『危ないです』の意味がやっとわかったわ……私って危なっかしい人だったのね。でも、そんなつもりはまったくなかったのよ～。
ま、過ぎたことは仕方ないわね。これから気をつけましょう。うん。

◆　◆　◆

今日の護衛と案内役としてアンナさんに紹介していただいたお二人は、明日出発するティユルへの旅でも護衛を請け負ってくださった方々でした。
今日はお二人だけど、明日からは五人になるとのこと。
案内役兼護衛役はイリスさんという女性で、蒼っぽい銀色の髪を一つ結びにした背の高い細身の方です。
荷物を持ってくださるのは、シェヌさんというイリスさんよりもっと背の高い、すらっとした褐